

## 特集

### 「教育体系の構築方法②」・・・実力を高めるためには？

前回から、新しい特集が開始しました。  
題して、「教育体系の構築方法」。  
社員教育を効率的、効果的に進めるためのポイントを解説します。

なお、本誌のバックナンバーは、以下のサイトでご覧になることができます。  
<http://www.thanksmind.co.jp/newsletter.htm>

#### 1. 社員教育はなぜ重要なのか？・・・前号の復習（詳細は前号参照）

##### 社員教育は、厳しい時代を生き残るための、ひとつの条件！

今の時代、「市場が成熟している」と言われています。  
少子高齢化が進展する中、多くの業界で、市場は縮小する傾向にあります。  
一方で、競争相手は相変わらずたくさんいます。  
競争が激しくなるにつれて、当然、力が弱い企業は淘汰されます。  
生き残るためには、どんな会社も強い会社にならなければならないのです。

強い会社になるためには、以下の通り、「**3つの条件**」をクリアしなければなりません。

##### 条件1

方針／戦略が正しい！

##### 条件3

戦略と社員のパワーを  
結びつける仕組みが整備！

##### 条件2

社員ひとりひとりが  
実力を高めて発揮する！

社員教育の  
重要性！

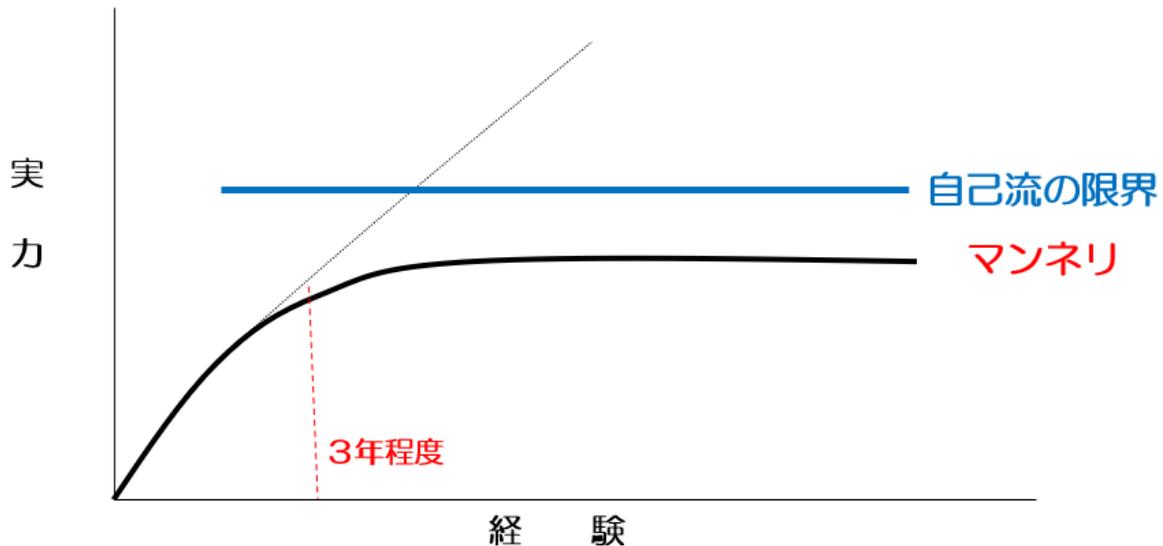
## 2. 実力を高めるためには、どうしたらいいか？

上述の通り、社員ひとりひとりが実力を高め、それを発揮することは、厳しい時代の中で生き残るための重要なカギです。

それでは、どうしたら社員は実力を高めることができるのでしょうか？

「社員自身が努力をすべき！」

確かにその通りなのですが、実力を高め続けることは、そう簡単なことではありません。



実力を高めるために、経験を積むことが大事だということに異論をはさむ人はいないでしょう。しかしながら、単に経験を積むだけで、自然と実力が高まるのは、実は最初の3年程度なのです。初めての仕事についたばかりの時は、右も左も分からずに、決められたことや、言われたことを、ひたすらこなすことに専念します。

そうしている間に、製品知識、業務知識等がだんだん身につけていき、3年くらい経過するとひと通りのことができるようになります。

これが、いわゆる「一人前」の状態です。

それは、本人にとっても会社にとっても、良いことなのですが、それから先が問題です。

繰り返しの仕事が多くなり、代り映えのしない毎日、いわゆる「マンネリ」になってきます。

マンネリに陥ってしまうと、いくら真面目に仕事をしていても、新しいことが身につかず、成長が止まってしまうのです。

### 成長のカギ① 受身ではなく、能動的に工夫しながら仕事をする！

成長し続けるために、まずやるべきことは、能動的に工夫しながら仕事をすることです。

「こんなことをしてみたらどうか？」

自ら考え、実践することが必要なのです。

#### 【イチロー選手のすごさ】

今年、メジャーリーグで殿堂入りを果たしたイチロー選手。

打率3割、200安打を10年連続で成し遂げました。

イチロー選手は、「努力の人」と言われますが、彼の一番すごいところは、「常に考え工夫する」ところです。

それを象徴する、ひとつのエピソードが「ランニングフォームの変更」です。

イチロー選手は、日本でプレーしていた頃は、腿を高く上げて、跳ねるような走り方でした。俊足であり、日本でも2度盗塁王に輝いていました。

しかしながら、アメリカに渡ってしばらくした時、彼は、その走り方に限界を感じました。

腿を高く上げる走り方は、身体が疲れていない時は問題ないのですが、疲れが溜まってくると、段々と腿が上らなくなります。

そうになると、走るスピードが落ちてしまうのです。

ご存知の通り、アメリカでは、広大な国土を移動しながら試合をします。

西海岸のシアトルで試合した翌日、東海岸のニューヨークで試合をするようなことも度々あります。

また、レギュラーシーズンの試合の数も162試合と、日本の143試合と比べて、圧倒的に多いです。

過密日程ですので、休みが無いだけでなく、1日2試合行う場合もあります。

メジャーリーグは、メチャクチャ過酷な状況の中で、日々戦い続けているのです。

従って、いくら自己管理を徹底して疲れを残さないようにしても、やはり疲れが溜まってしまう時期があるのです。

「どうするか？」

イチロー選手が出した結論は、「ランニングフォーム自体を変える」ということでした。

若い頃から、慣れ親しんだフォームを変更するなんて、常人ならば、まず考えることは無いでしょう。

そこまで考えられることがイチロー選手のすごいところです。

その後、トレーナーと一緒に変わって変更に着手し、最終的には、「摺り足」のようなフォームになりました。

さて、その結果は？

走る速度自体は、従来と変わらないものの、どんなに身体に疲れが溜まっても、いつも同じようなスピードで走ることができるようになったのです。

ちなみに、このランニングフォームの変更は、イチロー選手の工夫の一例です。

イチロー選手は、引退するまで、毎年、ずっと工夫をし続けていたのです。

## 成長のカギ② 様々な「基本」を習得すること！

「あなたが言いたいことは、結局、精神的なことですか？」

そんな声が聞こえてきそうです。

確かに、上述の通り、意識や姿勢といった精神的な面は不可欠です。

しかしながら、それだけでは限界があります。

成長し続けるための、二番目のカギは、様々な「基本」を習得することです。

「基本」を身につけていなくても、仕事の中で、いろいろ工夫する人は、マンネリの人と比べれば成長します。

しかし、すぐに、限界にぶつかります。

その天井が、いわゆる「自己流の限界」です。

それでは、なぜ、自己流だと、すぐに限界が来てしまうのでしょうか？

その理由は、自己流では、「視野が広がらない」からです。

例えば、自部署の上司や先輩が行っていることを見て、「自分もやってみよう！」と真似てみることはできます。

もちろん、これは良いことであり、やるべきことです。

しかし、どれだけの上司、先輩が周囲にいるのか？

真似られることを全て行ったら、それ以外にやる事が無い・・・

それが限界なのです。

一方で、「基本」を習得できている人は、いろいろなことを考えることができます。  
「まずは、こうしたことをやってみて・・・もし、それでもダメならば、次はこういうこと・・・」  
要するに、工夫をするためのネタの数が圧倒的に違うのです。

### 【羽生善治棋士のすごさ】

今、将棋は空前の大ブームだそうです。  
最大の理由は、言わずと知れた、藤井聡太棋士の大活躍です。  
こうしたブームの中で、また脚光を浴びたのが、今から1996年の羽生善治棋士の7冠達成の偉業です。  
当時、25歳の羽生棋士は、史上初めて、全7タイトルの独占に成功しました。  
その時の羽生棋士のあだ名が「宇宙人」です。  
どうして、そんな、あだ名がついていたのか？  
将棋には、様々な局面があり、局面ごとに「定石」という基本の手があります。  
当時の羽生棋士は、そうした定石を無視した手を、どんどん指していました。  
「今、どうして、こんな手？」  
対局者は、予想もしない手に為すすべなく負けてしまっていたのです。  
それでは、羽生棋士は、ほとんど基本（＝定石）を学習しないで、自らの感性で指していたのか？  
それは全くの逆。  
羽生棋士は、幼い頃から徹底的に基本を学んだ勉強家。  
そうした基本をベースに、自ら考えた工夫で勝負していたのです。

しかし、そうした斬新な手も、やがて周囲の棋士に研究されるようになり、羽生棋士は、保持していたタイトルを、どんどん失って行きました。  
誰もが、「羽生時代は終わった」と思っていました。  
しかし、羽生棋士は見事に復活を遂げたのです。  
その復活のポイントについて、ある時、雑誌のインタビューで答えていました。  
「羽生さん、素晴らしい復活ですね。何がポイントだったのでしょうか？」  
「まあ、いろいろあると思いますが、私の場合はチェスを徹底的に研究したことが大きかったですね」  
「チェス？」  
「はい。いろいろとヒントになることができました」

「能動的に工夫しながら仕事をしよう！」  
当たり前のことですが、それは、言葉で言うほど簡単なことではありません。  
工夫するためには、そのヒント（ネタ）になる、ことが無ければダメなのです。  
自己流では、すぐにネタが尽きてしまいます。  
様々な基本をインプットすることにより、視野が拡がり、工夫を考えることができるようになるのです。

コミュニケーション、ロジカルシンキング、会計、マーケティング・・・  
仕事には、様々な基本があります。  
もちろん、社員の中には、これらのスキルを自己啓発だけで身につける人もいるでしょう。  
しかしながら、そういう方は、やはり稀。  
「何から勉強したら良いか分からない・・・」  
「勉強しようと思っはいるけれど、仕事や家庭が忙しくて、なかなかできない・・・」  
このように声が多いのです。  
「最低限の教育は会社が体系的に実施した方が良い」  
今の時代では、このような考え方が主流になりつつあります。